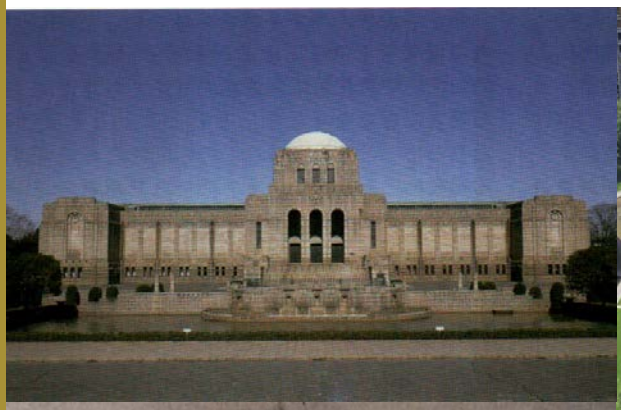
ISSN 2432-9207
国立国語研究所 研究情報誌

国語研

ことばの波止場

NINJAL Research Digest

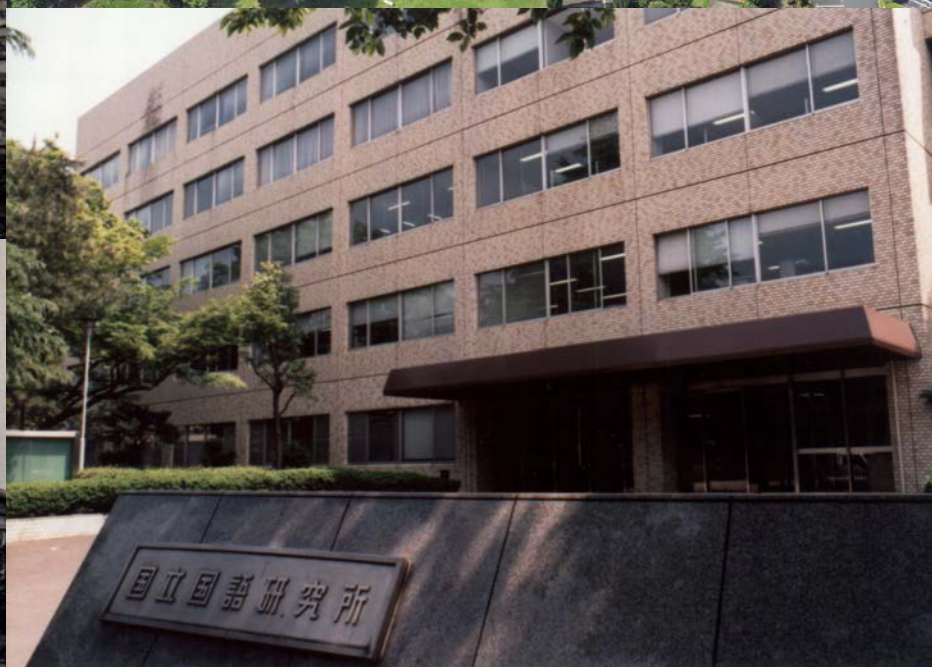
vol.6
2019.9











特集

対照言語学と音声言語

世界の言語を実験で比べてみる
コーパスを通して話し言葉をながめる

70 &10 ANNIVERSARY

周年記念企画 年表でたどる国立国語研究所の歴史

歴史的刊行物紹介・著書(近刊)紹介

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics
NINJAL



PROJECT

対照言語学と音声言語

世界の言語を実験で比べてみる

松本曜

MATSUMOTO Yo

まつもとよう●理論・対照研究領域教授

国立国語研究所『使役交替言語地図』
http://watp.ninjal.ac.jp/　（地図データ ©Google, INEGI）

「対照言語学」プロジェクト

対照研究はどうして重要か

ある言語をほかの言語と比較すると、その言語に関する理解を深めることができます。ほかの言語と比較することで、それまでは思いつかなかった新しい研究課題に気が付いたりします。また、ほかの言語を見て、日本語と驚くほど似た現象があることに気づき、その現象の特徴が再認識されたりします。日本語に特有と思われていた現象も実際にはそうではないことが分かることもしばしばです。

国立国語研究所の理論・対照研究領域では、日本語をほかの言語と比較対照することによって、日本語の性質を明らかにしようとしています。また、日本語の分析を通して、言語一般の理解に貢献しようとする研究も行われています。研究は多岐にわたっており、日本語の音声に関するものから文法・意味に関するものまで様々です。また、比較の対象も中国語、英語といった話者数の多い言語のほか、少数話者の言語にまで及んでいます。そのように多くの言語を見ることで、言語の多様性と共通性がより深く理解でき、その中に日本語を位置づけることができると考えているからです。

共同研究プロジェクト

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト（以下、対照言語学プロジェクト）は、図1のようにいくつかの班に分かれて活動を行っています。音声研究班（窪薗教授）では、語と文のプロソディーを中心とした研究が行われています。もう1つは文法研究班ですが、これはさらに、名詞修飾班（パルデシ教授、窪田准教授）、とりたて表現班（野田教授）、動詞の意味構造班（松本教授）の3つがあります。いずれも日本語に関する観察を出発点にして諸言語の研究をしている点が特徴です。たとえば名詞修飾班では、「トイレに行けないコマーシャル」のように英語などにはそのまま訳せない名詞修飾表現について、諸言語でそのような表現がどの程度可能なのかを研究しています。とりたて表現班では、「さえ」「すら」などのとり

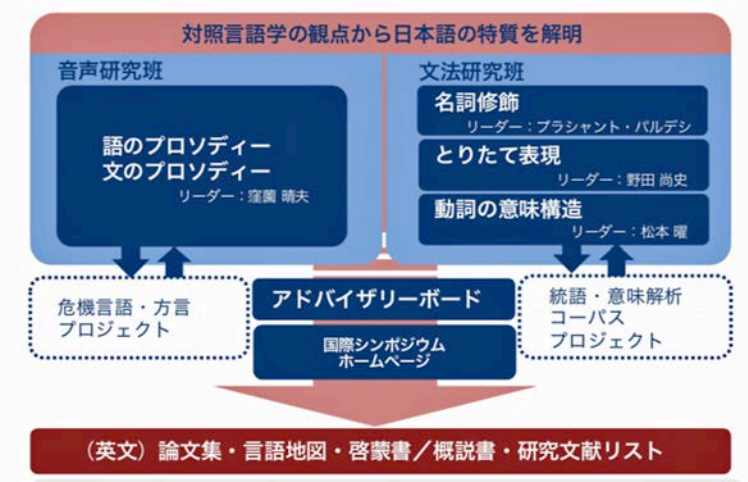


図1　対照言語学プロジェクトの構成と活動

たて助詞に相当する他言語の表現を、日本語と比較しながら研究しています。

これらのプロジェクトは国語研の他のプロジェクトと連携し、国際的アドバイザリーボードの助言を受けながら行われています。諸大学の研究者と協力しながら、分析結果を提示することで成果を上げようとしています。



写真1　Prosody & Grammar Festa 3

研究成果の発信

対照言語学プロジェクトでは、研究成果を様々な形で公開しています。国内向けには、年に一度Prosody & Grammar Festaという発表会（写真1）を開き、4つの班の成果を共有しています。また、班ごとにシンポジウムなどを開いています。

また、国際シンポジウムや英語の書籍出版の形で、研究成果を国際的に発信することを重視しています。



写真2　最近の出版物
（いずれもDe Gruyter Mouton発行）
Handbook of Japanese Syntax 2017.10
Handbook of Japanese Contrastive Linguistics 2018.2
Tonal Change and Neutralization 2018.3

対照言語学プロジェクトでは、その成果に基づいて、ムートン社やオックスフォード大学出版局などの海外の出版社から書籍を出版してきました。代表的なものは写真2に示したとおりです。今後もこのような形で成果を発表していきたいと思っています。

諸言語の移動事象表現を実験的に比較する

ここでは、動詞の意味構造班の対照研究の1つの例として、移動動詞に関する研究を紹介します。

出来事を表現する

動詞は出来事を表すのに使われる品詞です。出来事をどう表現するかについて、諸言語には2つの違いがあります。まず、言語は、限りある形式を使って複雑な出来事を表現するものなので、出来事のどの側面に注目して表現するのか、選択を行なうことになります。その際、何を表現して何を表現しないかには言語による違いがあります。たとえば、しばしば指摘されるように、日本語の多くの方言には「あげる」と「くれる」の区別があり、物のやりとりが話者やそれに近い人に向けられたものなのか、そうでないのかを、動詞で区別して表現します。このような区別は日本語のほかインドの一部の言語に見られますが、他の多くの言語には見られません。何に注目するかが言語によって違うのです。

また、出来事の様々な側面を文のどの要素で表現するのかが、言語によって異なる場合があります。たとえば、日本語で「蠅が天井に**とまっている**」と動詞を使って表現するところを、英語ではThere is a fly **on** the ceilingと、前置詞を使って言い表します。反対に、英語で動詞を使って表す内容を、日本語では副詞を補って表す場合もあります。たとえば笑い方の表現がそうです。英語ではThe lady was **giggling**と言うところを、日本語では「その女の人は**くすくす**笑っていた」のように言います。このように、同じ事象を言語化する場合でも、そのどの側面を表現するのか、またそれをどのような品詞で表現するのかは、言語によって変わってくるのです。

移動事象の言語化

このような言語間の違いがはっきりと表れる事象に、空間移動があります。人や物が空間を移動するのを言語がどのように表すのかです。

たとえば、写真3に撮された移動事象を考えてみましょう。英語と日本語の話者なら、この事象を次のように表現するでしょう。



写真3　男の人が階段を駆け上がって来る

A man ran up the stairs toward me.
男の人が階段を駆け上がって来た。

この2つの文を比べると、いくつかの違いがあることがわかります。まず、日本語では〈上の方向へ〉という移動の経路を「上がる」という動詞で表していますが、英語ではupという副詞で表しています。また、日本語では〈こちら側へ〉という話者に対する方向性が、動詞「来る」で表され、「(駆け)上がる」と一緒に複雑な述語を作っています。それに対して、英語ではそれがtoward meという前置詞句で表されています。日本語では動詞が、英語では副詞・前置詞が活躍しています。

一般に、移動の経路については、それを動詞で表す言語と、それ以外の要素で表す言語があると言われており、日本語は前者であると主張されています。また、話者に対する方向性(ダイクシス)については、それを表現することが多い言語とそうでない言語があるとされ、日本語は前者であるという主張があります。

実験による諸言語の比較

対照言語学プロジェクトでは、このような主張を検討するため、実験調査を行ってきました。日本ではあまり行われてこなかった、ビデオ発話実験という手法です。これは、スクリーン上に短いビデオ映像を一定順序で提示し、それを実験協力者(被験者)に自分の言語で表現してもらうというものです。同じ場面を表す言語表現を諸言語で比較できることから、対照研究に適した研究手法で、欧米ではこの手法で移動事象の言語表現について調べる研究がすでに行われています。対照言語学プロジェクトではこの手法を用いて、表1に示した言語に関して調査を行いました。これは、国内外の大学にいる様々な言語の研究者との連携によらなければできない研究です。このような研究を組織するのも、大学共同利用機関である国語研の役割の1つと言えるでしょう。

日本語	英語	ドイツ語
フランス語	イタリア語	ハンガリー語
ロシア語	マラティー語	バスク語
スワヒリ語	クプサビニィ語	シダーマ語
モンゴル語	中国語	ネワール語
タイ語	タガログ語	イロカノ語
ユピック語	日本手話(JSL)	

表1　調査対象とした言語

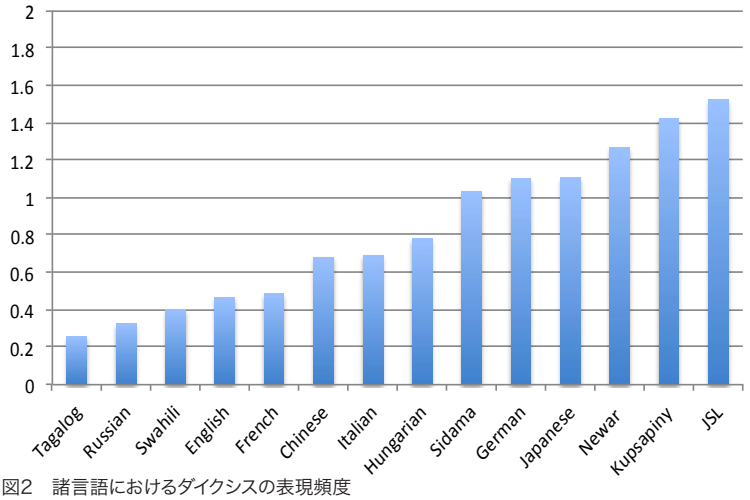


図2　諸言語におけるダイクシスの表現頻度

実験は3種類あり、それぞれ別の内容を調べています。そのうちの2つの実験は、ダイクシスをどう表現するかを調べたことが特徴です。たとえば階段を上がるシーンは、カメラから離れていくケース、カメラに向かっていくケース、そのどちらでもないケースの3つを撮影して提示しました。それによってダイクシスがどのように表現されるかを引き出すのです。このようにダイクシスに関する区別を体系的に組み込んだ実験は、国際的に見て珍しい試みです。

ダイクシスの表現頻度

このようにして行われた実験の結果から、各言語の話者がどのくらいの頻度でダイクシスに言及するかを調べることができます。その結果を示したのが図2のグラフです。1つのビデオクリップの描写に、ダイクシスの表現が平均何回使われたかを示しています。

この結果から分かるのは、日本語はほかの言語と比べて、ダイクシスに言及することが非常に多い言語だということです。ダイクシスの言及頻度が高い理由として、日本語では、話者に向かう移動で「来る」を使うほか、話者から離れる移動や中立的な移動の際にも、「行く」のような動詞が使われることがあります。ダイクシスの表現頻度が低い言語では、話者へ向かう移動の場合にのみダイクシス表現を用いる傾向があります。たとえば、英語では話者に向かう移動はtoward meなどでダイクシスを表しますが、その他の場合は省略されることが多く、away from meなどと、わざわざ言わない話者が多くいます。また、日本語の場合、話者に向かう移動の場合には、「こっちに来る」のようにダイクシスを複数回示すこともあります。このような結果から、確かに、日本語はダイクシスに言及することが多い言語であると言えます。

ただし、日本語よりもダイクシスの表現頻度が高い言語があります。ネパールのネワール語や、ウガンダのクプサビニィ語では、動詞に加えて副詞や動詞接辞でもダイクシスが表され、全体的な頻度が高くなって

います。日本手話（JSL）の場合は、手話使用者の前にある空間を用いて移動事象を表現するので、ほとんどの手の動きがダイクシス情報を含んでいます。ダイクシスに頻繁に言及する傾向は日本語のみのものではないということです。

経路をどう表現するか

次に、各種の経路を表すのに、諸言語がどのような手段を用いるのかについて、別の実験の結果を見てみましょう。先の階段を上がるシーンで、日本語は〈上方向へ〉という経路を「上がる」という動詞を使って表現することに触れました。これはどのような経路でも同じなのでしょうか。経路と一口に言っても、様々なものがあります。図3にあるものがそのいくつかの例です。

これらのすべてについて、日本語は動詞を使うのでしょうか。先の実験と同じ手法を使って、15種類の経路について、10の言語で調査を行いました。その結果、日本語については以下のような回答が得られました。

UP：女の人が階段を歩いて**登って**行った。
ACROSS：男の人が道路を走って**渡って**行った。
AROUND：男の人が木の**周りを回った**。
TOWARD：男の人がテーブル**に向かって**走って行った。
ALONG：男の人が川**に沿って**歩いて行った。

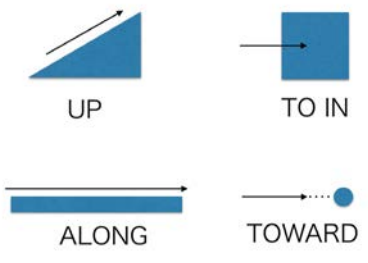


図3　様々な経路

UPやACROSSの意味は動詞のみで表していますが、そうではない経路もあります。AROUNDは、「回る」などの動詞に加えて、経路を「周り（を）」というヲ格位置名詞で付加的に表現しています。TOWARDやALONGでは「に向かって」「に沿って」という複合後置詞が用いられます。本来動詞であった「向かう」「沿う」を、わざわざ後置詞化して使っているのです。このように、日本語において、すべての経路が動詞で表わされるわけではないことが分かります。

この調査を諸言語において行った結果、経路の種類によって表現パターンが異なる言語が多いことが分かりました。さらに、諸言語に共通した、ある傾向があることが明らかになりました。具体的には、経路には動詞で表しやすいものから、動詞で表しにくいものまで、共通の序列があるということです。最も動詞で表現されやすいのは上下の方向を表すUP/DOWNであり、次がACROSS、OUT、INTOなどです。一方、動詞で表現されにくいのはTOWARD、ALONGです。この観察に基づいて、動詞で表されやすいものを図の右寄りに位置させて意味地図を作ると、図4のようになります。ここではその意味地図の上で、日本語でどのような割合でそれぞれの経路に動詞が用いられたかを色の濃さを用いて表しています。右に行くに従って、濃い色で表されている（動詞で表すことが多い）ことがわかります。他の言語においてもこれと似た傾向が確認されています。

この発見に基づいて、言語間における移動表現の差異に関して、新しい説明方法が得られます。従来、移動の経路を動詞で表す言語と、それ以外の要素で表す言語があると言われてきました。先ほどの意味地図に基づく考え方からすると、経路を動詞で表すとされていた言語は、その範囲が意味地図で左寄りの種類の経路にまで及んでいる言語ということになります。つまり、移動表現における言語差は、この意味地図のどの範囲を動詞で表すのか、という観点から定義されることになります。

成果の公表

上で述べてきた移動動詞の研究成果については、2019年1月に、国語研で行われた国際シンポジウムMotion Event Descriptions across Languagesで報告されました。15の言語における移動事象の表現の仕方についての発表が行われると同時に、それらの比較に基づく発表も行われ、海外からの招待講演者とともにその意義を議論しました。今年の8月に関西学院大学で行われた国際認知言語学会（対照言語学プロジェクトが共催）でも、この移動動詞に関する成果が発表されました。

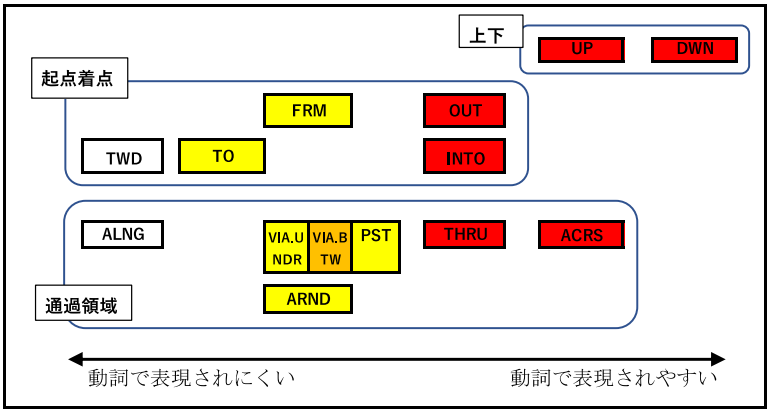


図4　経路の意味地図と、日本語における動詞使用率（担当：吉成祐子）



PROJECT
対照言語学と音声言語

コーパスを通して話し言葉をながめる

小磯花絵・丸山岳彦
KOISO Hanae　MARUYAMA Takehiko

こいそはなえ●音声言語研究領域教授
まるやまたけひこ●専修大学教授／音声言語研究領域客員教授

西尾実　初代所長によるあいさつ
（国立国語研究所創立10周年祝賀式、1959年3月6日、学士会館）

コーパスで話し言葉を縦と横につなぐ

「会話コーパス」プロジェクト

国立国語研究所ではこれまで様々なコーパス（言葉のデータベース）を公開してきました。図1は、コーパス開発センターを中心に公開しているコーパスの一覧です。共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」（「会話コーパス」プロジェクト）が始まった当時、グレーで記したコーパスしかありませんでした。書き言葉のコーパス（上の段）は、小説や新聞、雑誌、行政白書など多様なジャンルのテキストをバランスよく収めた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）や、奈良時代から大正時代までの書き言葉を対象とする『日本語歴史コーパス』（CHJ、構築中）など、とても充実していますが、話し言葉のコーパス（下の段）は、一人の人が話すスピーチを中心に集めた『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）しかありませんでした。私たちが普段の会話でどのような言葉づかいをしているのか、また話し方がどのように変化してきたかを、コーパスを使って調べることが難しい状況だったのです。

そこで「会話コーパス」プロジェクトでは、2016年から2018年にかけ、グリーンで記した5種類の話し言葉のコーパスを公開してきました。この3年間で話し言葉のコーパスがかなり充実したことがわかります。これにより、コーパスを用いて、書き言葉と話し言葉を比べたり、話し言葉の時代による変化を調べたりすることができるようになりました。まさに書き言葉と合わせ、言葉の変化を縦の軸と横の軸でとらえることのできる環境が揃ったことになります。

ここでは昨年度公開した『日本語日常会話コーパス』（CEJC）と『昭和話し言葉コーパス』をご紹介します。

『日本語日常会話コーパス』

私たちは相手や場面によって言葉を使い分けています。こうしたことを調べるには、多様な場面における様々な人との会話を記録する必要があります。しかし、日常場面で交わ

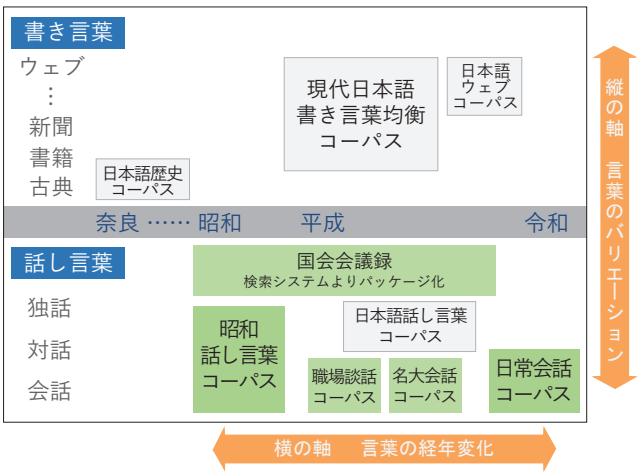


図1　研究所が公開している主要な書き言葉・話し言葉のコーパス。緑はこのプロジェクトで構築



図2 『日本語日常会話コーパス』(CEJC)

される会話を自然な状態で記録することは容易ではありません。

そこでこのプロジェクトでは、一般の方40名にお願いをし、様々な場面での様々な人との会話を、映像を含めて収録していただきました。ビデオカメラやICレコーダーなど多くの機材を使っての収録ですから、かなり大変だったと思いますが、多くの方にご協力いただいた結果、図2にあるように、実に多様な会話が集まりました。

2021年度末に200時間の会話を収めたコーパスを公開する予定ですが、このうち50時間の会話を対象に、2018年度、試験的な公開を開始しました。

このコーパスでは、文字化テキストや単語情報だけでなく、音声や映像データも公開しています。そのため、イントネーションや身振りなども含め、色々な角度から会話の言葉や振る舞いを調べることができます。映像を含めて日常会話をこの規模で公開するのは、世界でもこのコーパスが初めてです。関心のある方は是非使ってみてください。

『昭和話し言葉コーパス』

本プロジェクトで構築を進めているもう一つのコーパスが、『昭和話し言葉コーパス』です。このコーパスは、1950年代から1970年代（昭和20年代後半から40年代後半）にかけて、当時の国立国語研究所で録音されていた音声資料を再編し、現代の技術でコーパス化しようとするものです。

国立国語研究所では、1952年、共通語の話し言葉研究を目的とした「第1研究室」を開設しました（1954年「話しことば研究室」に改称）。中村通夫、大石初太郎、飯豊毅一、宇野義方、進藤咲子といった当時の所員たちは、日常のさまざまな場面における会話や独話、約40時間分の音声をオープンリールテープに録音し、精密に書き起こしたうえで、そこに見られる韻律・語彙・文法などを定量的に分析するという、新しい研究を始めました（写真1）。当時の研究成果は、『談話語の実態』（1955年）、『話しことばの文型（1）（2）』（1960年、1963年）という研究報告書として刊行されています。コンピュータもない時代、このような大規模な定量的研究が実現できていたことには、驚きを禁じえません。現代から見れば、この研究こそ、コーパスに基づく日本語話し言葉研究の源流として位置づけられると言えるでしょう。

では、その時に録音された音声資料は、どこに行ったのでしょうか。当時オープンリールに録音された音声は、実は1990年代、DATにダビングされた後、研究資料庫に保存されていました。ただし、その音声を公開しようとする動きはなく、正に「お蔵入り」の状態だったのです。

そこで、1960年代以降も継続的に録音されていた音声資料を含め、過去の音声資料を現代の技術でコーパス化することを提案し、2016年、本プロジェクトにおいて『昭和話し言葉コーパス』の構築を開始しました。2018年度末には、独話17時間分の音声資料を試験的に公開しました。最終的には、会話25時間分の音声資料を加えて、『昭和話し言葉コーパス』として一般公開すべく、作業を進めています。



写真1 『国立国語研究所要覧 昭和30年度』より、当時の録音風景

書き言葉や講演と比べると

多様なジャンルの書き言葉を含むBCCWJ、スピーチを中心とするCSJ、日常会話を収めたCEJCを比較することによって、言葉の使い方がどのように異なるかを見てみましょう。

図3は、「彼は若い**が/けれども**、とてもしっかりしている。」のような文に見られる、接続助詞「が」「けれども」類の使用率をグラフにしたものです。グラフから、硬い文体の行政白書では「が」しか使われないのに対し、コラムなどを含む新聞、雑誌、話し言葉に近いとされるブログになるにつれ、使用率が減っていくのが分かります。話し言葉では、改まり度の高い国会での答弁や学会講演よりも、個人的体験談などを語る模擬講演の方が「が」は減り、改まり度の最も低い日常会話ではほとんど使われなくなります。

「が」に代わって台頭するのは「けれども」類です。表現の内訳を見てみると、国会では「けれども」が、日常会話では「けど」が大半を占めています。「けれども」は改まった場で、「けど」はくだけた場で使われやすい表現であることが分かります。

複数のコーパスで言葉を「縦」につなぎ比べることによって、文体の硬軟や場の改まり度に応じて私たちが言葉を多彩に使い分けている様子が見えてきます。

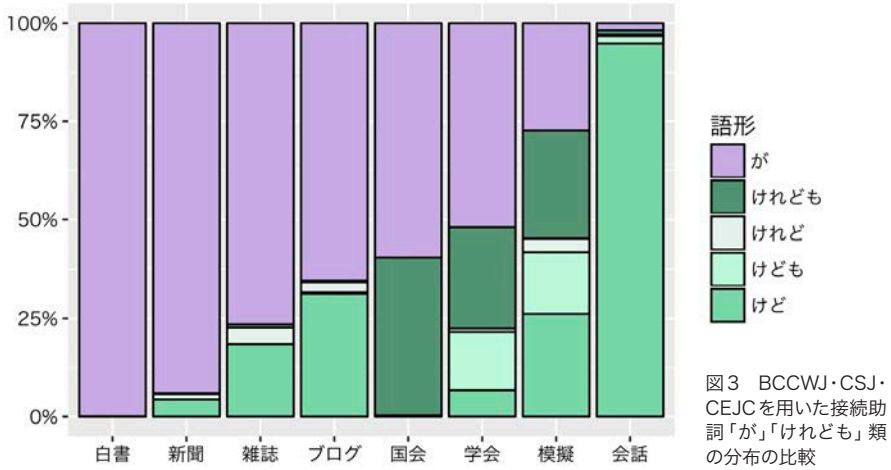


図3　BCCWJ・CSJ・CEJCを用いた接続助詞「が」「けれども」類の分布の比較

日常会話の中での使い分け

「が」「けれども」では、日常会話を一まとまりにし、書き言葉やスピーチと比べましたが、一口に日常会話といっても、家族との雑談もあれば取引先との打合せなどもあります。日常会話の中にも、多彩な言葉の使い分けが見られそうです。

そこで、CEJCだけを用い、話し手の属性や場面などによって、私たちがどのように言葉を使っているかを見ていきましょう。

図4は、感謝の表現「ありがとう」「ありがとうございます」、それから、「あざっす」「あざます」のようなくだけた表現（あざっす系）の使用の分布を、話者の年齢・性別・話し手から見た聞き手の関係性・場面ごとに比較したものです。

「あざっす」に着目すると、主として10〜20代の若い男性が友人知人との雑談において用いていることが分かります。またどの年齢も、またいずれの性別も、ほぼ半数は丁寧な形である「ありがとうございます」を用いています。

この割合に影響するのは、聞き手の関係性や場面です。相手が家族よりも先生や取引先、同僚の場合に、また雑談よりも会議会合の場合に、「ありがとうございます」がより用いられていることが分かります。

多様な話者・多様な場面の会話を収めたコーパスだからこそ、私たちが日常の中で言葉を使い分けている実態を浮き彫りにできるのです。

▼『日本語日常会話コーパス』モニター版

https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor.html

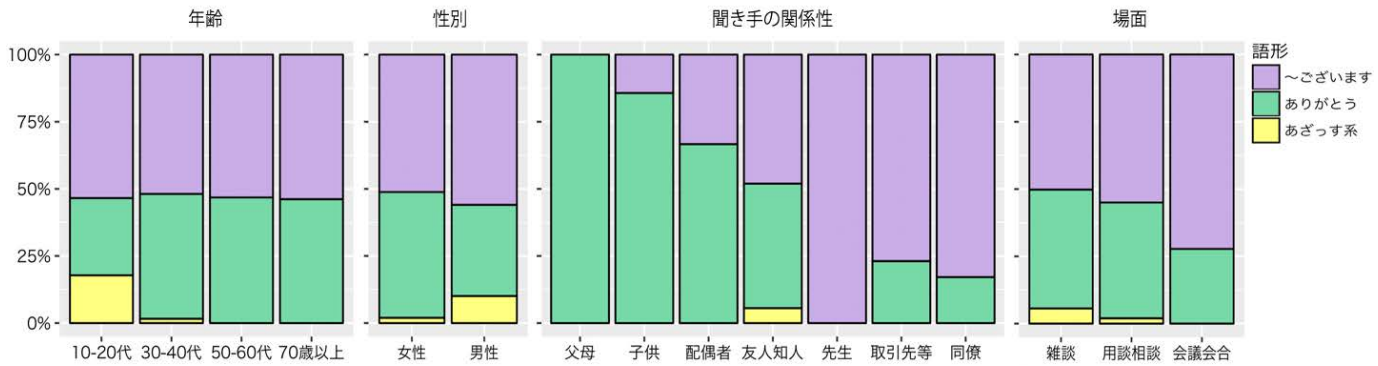


図4　「ありがとう」類の表現の分布：年齢・性別・聞き手の関係性・場面

『昭和話し言葉コーパス』を通して言葉をながめる

過去の音声から分かること

次に、『昭和話し言葉コーパス』を使うと、言葉のどのような姿が見えてくるのか、考えてみましょう。ここでは、(1) 発話の急激な上昇調イントネーション、(2) 文法形式のゆれ、という2つのトピックを取り上げることにします。

急激な上昇調

1950年代に録音された音声を聞いていると、現代では見られないイントネーションの型を見つけることがあります。図5は、1957年に録音された「3人の女性」という音声資料に記録された発話のピッチ曲線（音の高さの変化を表したもの）です。頭の中で、音を再現してみてください。

この発話では、「卵の黄身ね」の「ね」、「すり鉢でするのよ」の「よ」の部分で、イントネーションが急激に上昇していることが分かります。現代でも「ね」や「よ」は上昇することが多いですが、それと比べて上昇の程度がかなり激しいのです。

私がこの音声を聞いてすぐに思い出したのは、「銀幕の女優」たちの声でした。例えば、『東京物語』に主演した原節子は、映画の中でこのような「急激な上昇調」を多く使っています。このような上昇調は、昔の映画の中だけに見られる特徴的なイントネーションだと思っていた私にとって、この発見は大きな驚きでした。急激な上昇調は、映画特有のイントネーションというわけではなく、当時の若い女性たちが日常会話の中で使っていたものだったのです。

現在でも、例えば黒柳徹子氏など、高齢層の女性の発話には、急激な上昇調が見られることがあります。当時の「若者たち」が、当時のイントネーションを現代にまで引き継いでいる、と見ることができるでしょう。

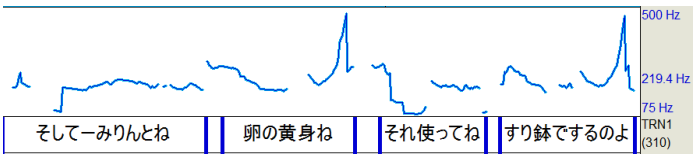


図5　発話中に見られる急激な上昇調（1957年録音「3人の女性」）

文法形式のゆれ

次に、「文法形式のゆれ」という点について見ていきましょう。1950年代の音声資料の中には、以下のような例があります。

a. 非常に予算の窮屈な、あー、時代であり**ます**から、

b. 国語の問題というのは難しいんであり**ます**から、

これらはどちらも、1959年「国立国語研究所10周年記念式典」で小説家の山本有三が祝辞を述べている発話です。同じスピーチの中で、山本は「あり**ます**から」「あり**ます**から」という2つの形を使っています。

ある1つの文法形式が複数の形で実現される場合を、「文法形式のゆれ」と呼びます。上記の場合は、助動詞「ます」とその古い形「まする」の両者が、個人の中で「ゆれていた」ことを表しています。このような話し言葉の実態は、書かれた言葉から明らかにすることはできません。

現代の話し言葉では、「あります」という表現はまず使われないと考えられます。では、「ます」と「まする」はどう共存し、その分布はどう変化してきたのでしょうか。

そこで、1910年代から1940年代にかけてSPレコードに録音された演説を集めた『岡田コレクション』（「岡コレ」、18.5時間）、そして2000年前後に録音された『日本語話し言葉コーパス』（CSJ、651時間）を『昭和話し言葉コーパス』の前後に配置し、「ます」と「まする」を検索して、その比率を算出してみました。表1を見ると、大正時代にはすでに5.9%だった「まする」が、時代を追うごとに減少していく様子を見て取ることができます。

日本語の録音資料は、確認できる最古のもので1900年のパリ万博における録音だと言われています（清水康行氏の研究）。現在構築中の『昭和話し言葉コーパス』だけでなく、20世紀に録音された音声資料を総合的に集めて「横」の方向につなげれば、日本語の話し言葉がどのように変化してきたのか、その「経年変化」の実態を、コーパスをもとにして浮き彫りにできると考えられます。今後の研究にご期待ください。

▼『昭和話し言葉コーパス』
https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/showaCorpus/

表1　『岡田コレクション』、『昭和話し言葉コーパス』、CSJに現れた「ます」「まする」の分布

	岡コレ (1915-1944)						昭和話し言葉コーパス (1952-1974)		CSJ (1999-2001)	
	大正 1915-1926		昭和1桁 1926-1935		昭和2桁 1935-1944					
ます	272	94.1%	780	95.6%	912	97.3%	5,261	98.2%	5,604	100.0%
まする	17	5.9%	36	4.4%	25	2.7%	97	1.8%	0	0.0%

創立70周年・人間文化研究機構移管10周年記念企画

年表でたどる 国立国語研究所の歴史

～昭和・平成・令和～

初代所長 西尾実
（在任：1949～1960）

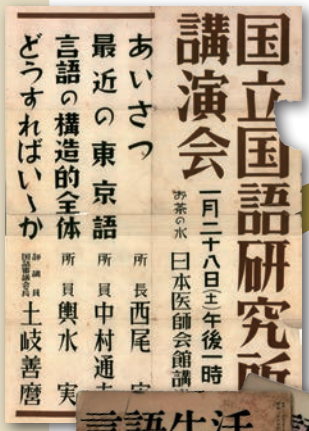


1948（昭和23年）	国立国語研究所設置法公布施行（12月20日）
1948	聖徳記念絵画館（東京都新宿区）の一部を借用
1949	初代所長に西尾実が就任
1949	八丈島の言語の社会的調査（ここから現在まで共通語化や敬語の調査を統計数理研究所と連携実施）
1949	白河市を中心とする言語生活の実態調査
1950	第1回鶴岡市での共通語化調査
1950	第1回公開講演会
1951	雑誌『言語生活』（国語研監修・筑摩書房発行）創刊
1953	『現代語の語彙調査：婦人雑誌の用語』刊行
1953	第1回地方調査員全国協議会
1953	第1回岡崎市での敬語調査
1954	東京都千代田区一ツ橋に移転
1954	『国語年鑑』刊行開始（～2009）
1957	『現代語の語彙調査：総合雑誌の用語』刊行（～1958）
1960	第2代所長に岩淵悦太郎が就任

共通語化調査を実施。翌年に国立国語研究所報告書の第1号『八丈島の言語調査』刊行。



研究所設立当時から、研究成果の公表に積極的に取り組む。早くも1回目の公開講演会を開催。





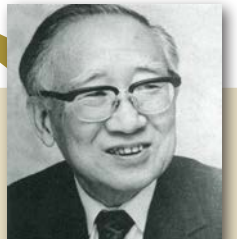
生活の中で用いられる言葉の姿や働きを見つめ、その研究成果をいちはやく広く発信していった。



データ選定に統計的手法を用い、のちの語彙調査の手法の基礎を築いた。

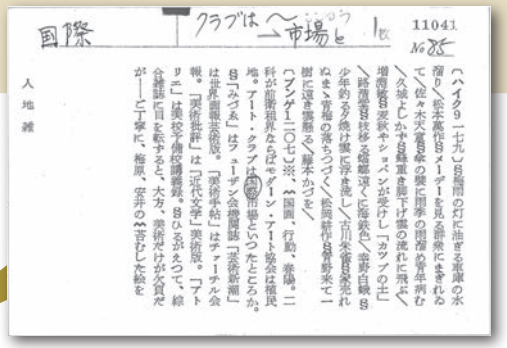


経年調査を開始。大規模でしかも長期にわたって繰り返すような調査は世界的にも珍しい。



第2代所長 岩淵悦太郎
（在任：1960～1976）

語種の割合や語の頻度などを統計的に精度高く明らかにした。世界的に見ても先駆的な研究成果。


国際　クラブは〜市場と

1962　『現代雑誌九十種の用語用字』刊行（〜1964）

1962　東京都北区西が丘に移転

1963　『沖縄語辞典』刊行

1964　『分類語彙表』刊行

1965　X線映画「日本語の発音」撮影（〜1967）

1966　電子計算機 HITAC 3010導入

1966　『日本言語地図』刊行（〜1974）

1968　文化庁附属機関となる

1970　『電子計算機による新聞の語彙調査』刊行（〜1973）

1971　第2回鶴岡市での共通語化調査

1972　第2回岡崎市での敬語調査

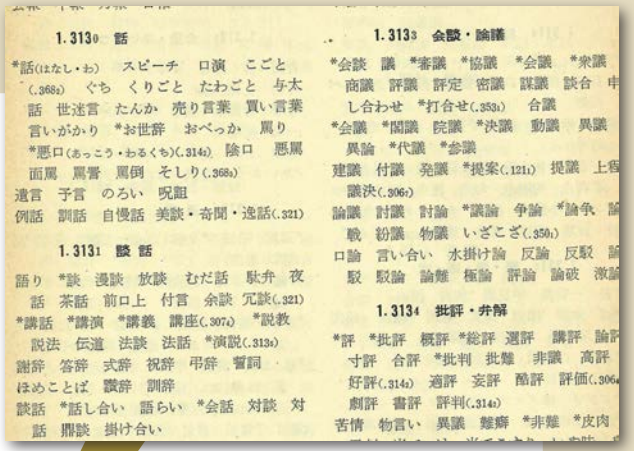
1974　日本語教育部設置

1975　NEC-C5210高速漢字プリンタ導入

1976　第3代所長に林大が就任

1978　世界初の漢字コード（JIS C 6226:1978）の制定に貢献

1979　皇太子殿下（当時）御視察

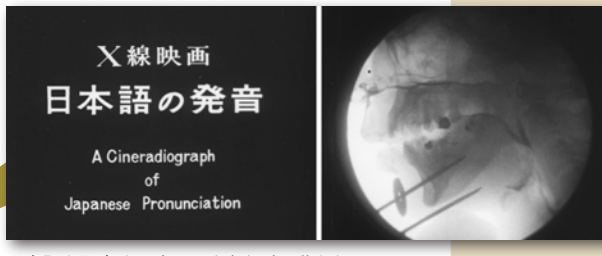

1.3130 話

1.3133 会談・論議

1.3131 談話

1.3134 批評・弁解

語を意味別に分類して並べたもの。シソーラス（類義語辞典）の草分け的存在。ベストセラー。



日本語を発音する時の口や喉などの動きを調べるために、X線映画を撮って分析。



新聞の語彙調査に導入。大量の漢字情報をコンピュータ処理する学術研究に世界で初めて挑戦。



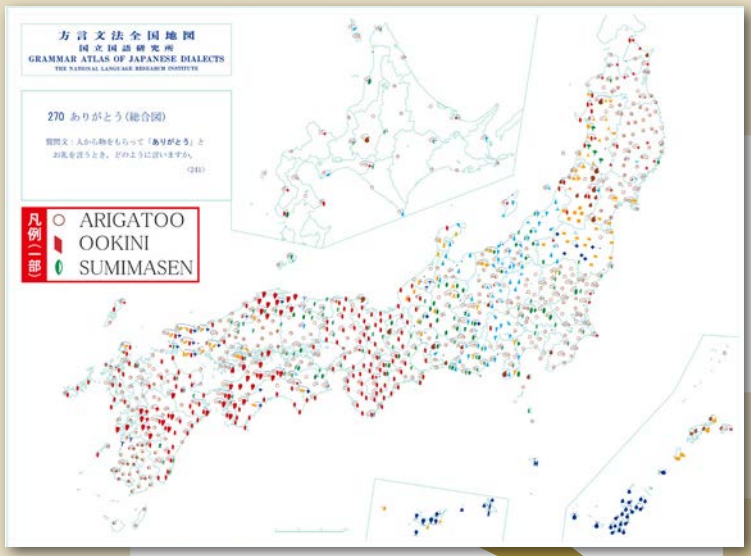
言葉の地理的な広がりを調べる言語地理学の手法に基づき作成した、日本最初の全国的な方言地図。

映像教材制作風景。大学などに日本語教師養成課程がない頃に、日本語教育・日本語教師養成に取り組んださきがけ。

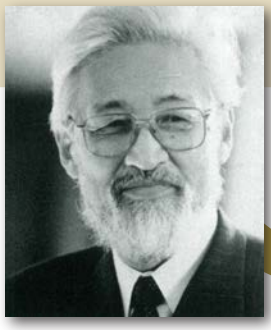




第3代所長 林大
（在任：1976〜1982）



文法に焦点をあてた地図。日本における言語地理学研究の発展に寄与。現在ウェブ上で公開中。



第4代所長 野元菊雄
（在任：1982〜1990）

第5代所長 水谷修
（在任：1990〜1998）

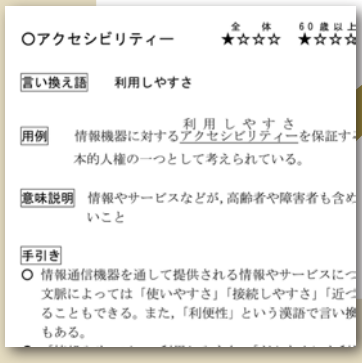


第6代所長 甲斐睦朗
（在任：1998〜2005）

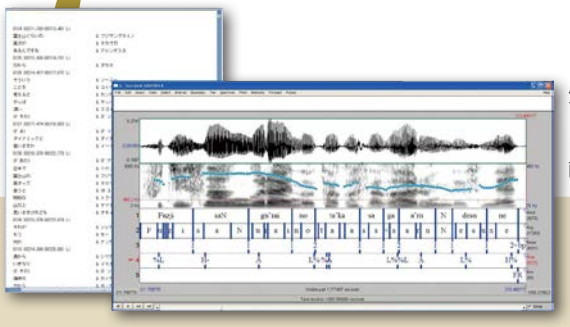




住民基本台帳や戸籍の人名・地名に関する約68,000字の漢字情報データベースを構築。



公共性の高い文章で使われるわかりにくい外来語を解説し、その言い換え例を提案した。



質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベース。産業界の自動音声認識精度の向上にも貢献。

1982	第4代所長に野元菊雄が就任
1984	『日本語教育のための基本語彙調査』刊行
1989（平成元年）	『方言文法全国地図』刊行（〜2006）
1990	第5代所長に水谷修が就任
1991	第3回鶴岡市での共通語化調査
1994	「国際社会における日本語についての総合的研究」開始（〜1999）
1998	創立50周年
1998	第6代所長に甲斐睦朗が就任
2001	独立行政法人となる
2002	『日本語教育ブックレット』刊行（〜2007）
2002	「汎用電子情報交換環境整備プログラム」開始（〜2008）
2003	「「外来語」言い換え提案」（〜2006）
2004	『日本語話し言葉コーパス』公開
2005	『現代雑誌の語彙調査：1994年発行70誌』刊行

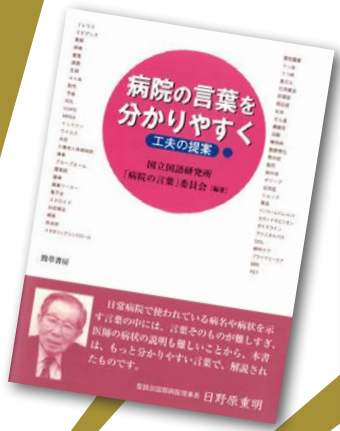


第7代所長 杉戸清樹
(在任:2005〜2009)

解析用UniDic (サイトにて配布中)

書字形(基本形)	発音形(基本形)	語形(基本形)	語彙素読み	語彙素	…
大きい	オーキー	オオキイ	オオキイ	大きい	…
おおきい	オーキー	オオキイ	オオキイ	大きい	…
おっきい	オッキイ	オッキイ	オオキイ	大きい	…

現在、約72万語。古文も解析可能。「Web茶まめ」にてウェブ上で利用可能。大手IT企業も利用。



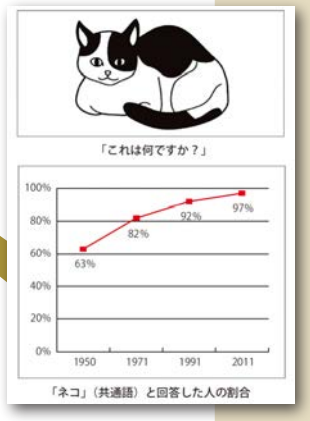
認知率や理解率の低い語の言い換えを提案。「エビデンス」は「この治療法がよいといえる証拠」などに。



第8代所長 影山太郎
(在任:2009〜2017)

トニー|は|見守った|。#|きみ|は|また|飲|んで|いる|」|トニー|は|優しく|言った|。#|	飲む	|(べき)|(じゃ)|(ない)|な|。#ひと|が|変わる|から|」#|サム|が|目|を|大きく|開く|。#一瞬|、	ノム	飲む		動詞-一般	五段-マ行	終止形-一般	図書館・書籍	リチャード・ノース・パターソン(著)/後藤 由季子(訳)	サイレント・ゲーム
「|原発|を|減らす|べき|」|と|答えた|人|は|合わせる|と|、|実|に|六十|三|パーセント|が|推進|政策	違る	|(べき)|(で)|(ない)|」|と|答えた|人|を|合わせる|と|、|実|に|六十|三|パーセント|が|推進|政策	ツクル	作る		動詞-一般	五段-ラ行	終止形-一般	出版・書籍	石巣 晃(著)	震災列島
の|設行|、|場合|によって|は|今|書った|よう|な|心配|を|感ずる|ならば|吸収|合併|	す	|(べき)|(で)|(なかっ)|た|か|と|も|思って|いる|ん|です|が|、|この|辺|どう|な|ん|です	スル	為る		動詞-非自立可能	文語サ行変格	終止形-一般	特定目的・国会会議録		国会会議録
。#そう|いう|意味|で|、|私|は|、|奉仕|活動|は|自発|的|に|する|べき|で|義務|化|	す	|(べき)|(で)|(ない)|と|いう|意見|に|つい|て|は|、|いささか|ちょっと|異なった|見解|を|持って|いる	スル	為る		動詞-非自立可能	文語サ行変格	終止形-一般	特定目的・国会会議録		国会会議録
は|、|利己|主義|では|ない|の|は|もちろん|の|	とる	|(べき)|(で)|(ない)|もの|は|と|べき|で|は|ない|し|、|と	トル	取る		動詞-一般	五段-ラ行	終止形-一般	出版・書籍	野木 空迎(著)	算命学について

書き言葉の全体像を把握するために、書籍、雑誌、新聞、白書など1億430万語のデータを格納。



音声の面では共通語化がほぼ完成したことが検証された。データサイエンスの手法も導入。



現在も歴史コーパス・日常会話コーパスなどの拡張や新規公開が続けられている。

2005	第7代所長に杉戸清樹が就任
2005	東京都立川市緑町に移転
2007	『形態素解析用電子化辞書UniDic』公開
2008	第3回岡崎市での敬語調査
2009	「「病院の言葉」を分かりやすくする提案」
2009	第8代所長に影山太郎が就任
2009	人間文化研究機構が設置する大学共同利用機関となる
2011	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』公開
2011	第4回鶴岡市での共通語化調査
2012	『日本語歴史コーパス』公開
2015	Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series刊行開始
2017	第9代所長に田窪行則が就任
2018	創立70周年
2019 (令和元年)	人間文化研究機構移管10周年



第9代所長 田窪行則
(在任:2017〜)

PUBLICATION REVIEW 刊行物紹介

国立国語研究所が 70 年の歴史において刊行してきた資料・報告のうち、代表的なもの（の一部）を紹介します。

地域社会の言語生活：鶴岡における実態調査（国立国語研究所報告 5）

秀英出版　1953 年



『地域社会の言語生活』は、国立国語研究所創立まもない1950年に山形県鶴岡市で行われた大規模言語調査の報告書である。きれいな結果が出たので、その後20年間隔で調査が繰り返された。報告書はすべてインターネットで公開され、国立国語研究所のサイトにおいてPDFで読める。とは言え、第4回調査まで全部読み通すのは大変だ。手早く結果を知りたいなら第2回調査の報告書『地域社会の言語生活：鶴岡における20年前との比較』がいい。第1回調査に比べ、発音について、順調に共通語化が進んだことが分かった。第3回・第4回調査の報告書は、数表とグラフが主体で、大勢を読み取るのが難しい。全体の傾向を見るには、単行本『社会言語科学の源流を追う』（次頁参照）がお勧めである。調査結果のエッセンスが紹介され、変化がきれいなS字カーブを描くことなどが示された。末尾には調査手法と結果の数表が載っている。

さらに調査データがインターネットで公開されたので、自分なりの分析ができる。鶴岡の近郊山添地区や北海道各地でも同じ項目の調査が行われて、結果が公開されているので、比較もできる。鶴岡調査は、2011年まで60年続いて、世界最長のことばの定点観測と見なされており、成果も国際レベルである。

▶井上史雄（東京外国語大学名誉教授）

現代雑誌九十種の用語用字 第 1 分冊〜第 3 分冊（国立国語研究所報告 21,22,25）

秀英出版　1962 年〜 1964 年



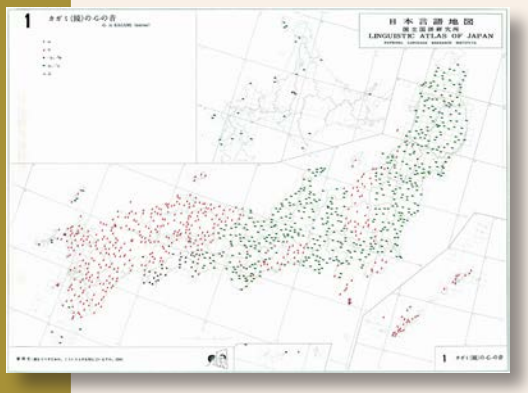
国立国語研究所は創立直後から書き言葉、話し言葉の双方で実態調査を行ってきたが、本書は書き言葉の実態調査である語彙調査の報告書である。この調査は、1956年に発行された雑誌から90タイトルを選び、サンプリング調査により得た延べ約53万語、異なり約4万語をデータとして調査分析を行ったものである。国立国語研究所では本書刊行以前に語彙調査が3回行われているが、本書はその集大成とも言える内容になっており、当時としては質・量ともに高水準の内容となっている。その後、量的に本調査を超える語彙調査は行われているが、質的に本調査を超えるものは未だに行われていないと言ってよい。

本書の学術的意義として語彙調査の方法論を確立させたことが挙げられる。語彙調査はデータを調査単位に分割し、それらに見出し語を対応させる過程を経るが、その際の手順が本書に詳細に規則化され、マニュアルとしてまとめられている。本書の社会的意義としては、調査結果の応用が挙げられる。基本語彙の選定の資料として精度の高い語彙表が日本語教育などで広く活用されたほか、漢字頻度調査の結果は1981年に制定された常用漢字の選定資料の1つとして利用された。このようなノウハウは、現在のコーパス構築の基礎技術としても使われている。

▶山崎誠（国立国語研究所）

日本言語地図　第1集〜第6集（国立国語研究所報告 30-1 〜 6）

国立国語研究所
1966年〜1974年



方言の分布を視覚的に捉えることを可能にするのが方言地図である。『日本言語地図』は「かまきり」「じゃがいも」「たんぽぽ」のような語彙を中心に1957〜1965年にかけて2400地点で行った臨地調査をもとに作成された方言の全国地図である。

ことばは、年齢層や居住歴により異なることがある。一方、方言地図に求められるのは場所による差である。したがって、分布を捉えるには、場所以外の条件をそろえることが求められる。『日本言語地図』は、調査時点において65歳以上でそれぞれの場所から移動していない人から聞き取った各地のことばを地図にしている。また、人は地図上では点になる。『日本言語地図』はそれぞれの場所の人が使うことばを点としての記号に置き換えて扱っている。さらに、それぞれの場所を地名ではなく、座標番号で表現し、恒久的な指定に耐えるようにした。

このように『日本言語地図』は地図の基本に忠実な資料である。これを手本に多くの方言地図が作成されたのは幸いであった。基本が堅持されているゆえ、刊行から年月を経ても多くの資料がGISのような新しく発展した手法による活用にも耐えるのである。資料作成におけるオーソドックスな手続きの大切さをよく示している。

▶大西拓一郎（国立国語研究所）

Book Review 著書紹介

シリーズ社会言語科学 2

社会言語科学の源流を追う

横山詔一・杉戸清樹・佐藤和之・米田正人・前田忠彦・阿部貴人 編

ひつじ書房
2018年9月



平成から令和への移行を機に、変容する日本社会と、それにともなって変わる日本語に思いをいたした向きも多かったろう。特に、災害の頻発と、来日外国人の増加は、私たちの日本語の運用に変革を迫っていると感じる。その象徴的なものが、災害時に外国人に緊急情報を伝える効果のある「やさしい日本語」の普及である。

日本の社会言語学の、近年目立っている潮流と、源流から長く続く流れとの両面をとらえる本書は、近年の潮流としての「やさしい日本語」から説き起こし、そこに流れ込んでいる、源流としての山形県鶴岡市での共通語化の定点経年調査を、様々な角度から解説する、野心作である。その解説は、調査・分析法、言語変化のモデルなど、精緻かつ高度なところに及んでいるが、その調査の基底をウェルフェア・リングイスティックス（福祉の言語学）の理念が支えてきたという主張が、強い印象を残す。

この理念は、平成になって設立された、本シリーズの母体である社会言語科学会が掲げるものであるが、実は、昭和から平成にかけて、国立国語研究所が重ねてきた、大規模社会調査の底流に流れ続けてきたものであったという、日本の社会言語学史を貫く一筋を明示した意義は大きい。

▶田中牧郎（明治大学）

新しい古典・言語文化の授業

—コーパスを活用した実践と研究—

河内昭浩 編

朝倉書店
2019年1月



学習指導要領の改訂に伴い、高等学校の国語は必修科目の区分として「現代の国語」と「言語文化」が新しく設定された。高校教員には教材との苦闘の日々が待っている。そのような時に本書は1つの道筋、光明となり得る。

理由の1つとして『日本語歴史コーパス（CHJ）』の構築があげられる。この成果によって、古典作品の中の言葉を様々な方法によって検索することが可能となった。通時的視点からも言葉を取り扱えるようになり、教員はより深く精緻な教材研究をすることができる。そして、本書では定番教材について具体的な検索方法と結果が述べられ、多くの新しい知見が示されている。そのため新しい教材研究の方法論を理解できる。

2つめは、教育現場での活用まで踏み込んで述べられていることである。単元目標から指導時数、学修の様子まで示されているために、読者は授業の明確な方向性とイメージを持つことができる。このことは国語学的研究と国語教育的研究の融合としての1つの在り方を示唆している。これは本書の執筆陣が共同的かつ有機的に研究成果を共有していることが大きい。本書のような先端的研究成果が教育現場に浸透し、豊かな言葉が育まれる国語教室が広がることを願う。

▶鈴木一史（茨城大学）

コミュニケーションの方言学

小林隆 編

ひつじ書房
2018年5月



コミュニケーションのしかたにも土地の文化・社会に根ざした地域差があり、全国一律ではない。例えば私が関西で衝撃を受けたのは、中学校の入学式直後の教室で新入生男子が先生にツッコミを入れる姿だった。初対面の目上を即興でイジって笑いをとる言語行動がアリなのか！　この生徒は確実に教室内の主導権を握って威信を得、先生もとがめはせず、手を焼きつつもテンポよく応じていた。

コミュニケーションのとり方の背後には地域の人々の「ことば」の捉え方や発想法が存在し、地域差となって顕れる。本書は、編者らが『ものの言いかた西東』（岩波新書）などで指摘してきたこうした地域差について、方言学としてさらに研究を切り拓きその魅力を伝える論文集である。挨拶や「断り」などの言語行動や談話の分析だけでなく、対人調整と敬語使用、話者交替、あいづちやフィラーなど、さまざまな切り口の論考がずらりと並ぶ。またボケとツッコミといった掛け合い型談話や「させてもらう」など、関西の特徴的な事象の歴史的研究も盛り込まれ、冒頭のような例を広い視野で捉える道案内もしてくれる。同時刊行の『感性の方言学』（ひつじ書房）とともに、読者を方言と文化・社会の濃密な世界に誘ってくれることだろう。

▶船木礼子（神戸女子大学）

編集後記

今回は創立70周年特集号です。年表のほか、過去の報告書で代表的なものを選んで書評を掲載しました。以下、国立国語研究所の庁舎に関する歴史を簡単にご紹介します。

【表紙写真左上】1948 年（昭和 23 年）12 月 20 日の創立から約 6 年間、明治神宮外苑にある聖徳記念絵画館（新宿区霞ケ丘町）の一部を庁舎として借用しました。途中で、山本有三邸（現在は三鷹市山本有三記念館）や新宿区立四谷第六小学校の一部を分室として借用していたこともあります。

【表紙写真左中】1954 年（昭和 29 年）10 月 1 日から千代田区神田一ツ橋の一橋大学所有の建物を借用・移転し、研究所全体が 1 ヶ所に統合されました。現在は学術総合センターが建っています。

【表紙写真左下】1962 年（昭和 37 年）4 月 1 日、北区稲付西山町（現在の北区西が丘）へ移転し、初めて自前の建物で研究を行うことが可能になりました。現在は国立スポーツ科学センターに隣接する味の素ナショナルトレーニングセンターの宿泊施設アスリート・ヴィレッジが建っています。

【表紙写真右下】1976 年（昭和 51 年）9 月 30 日、改築した本館（図書館、講堂、総務部なども配置）が竣工しました。10 月には日本語教育センターが発足しました。写真は創立 50 周年（1998 年）の頃のものです。

【表紙写真右上】2005 年（平成 17 年）2 月 1 日、現在の立川市緑町に移転しました。立川新庁舎竣工（しゅんこう）記念式典・祝賀会においては、心理学者としても著名な河合隼雄氏（当時の文化庁長官）が「国語研究所は新しい時代に応じた国語施策を充実させていくうえで、なくてはならない機関です」との祝辞を述べました。

（横山詔一）

※次号（vol.7）は2020年3月頃発行予定です。

国語研
ことばの波止場
vol.6

2019年9月30日発行

編集　国立国語研究所研究情報誌編集委員会
発行　大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
電話0570-08-8595（ナビダイヤル）
協力　くろしお出版
デザイン　黒岩二三［Fomalhaut］

https://www.ninjal.ac.jp/
©National Institute for Japanese Language and Linguistics